

序章

第一節 本論文の目的と問題設定

本論文は、大正末期、昭和初期という文芸思潮の過渡期における佐藤春夫の文学活動を主な研究対象としたものである。この時期は、文学の大衆化、西洋モダニズムの流行、プロレタリア文学の勃興など、文学史的にみて大きな転換期であった。大正文学の最前線に立つ佐藤は、こうした文芸思潮をどのように受け止め、現代文学が進むべき方向を模索していたのか。本論文は佐藤の作品と同時代の文化的コンテクストとの関係に注目しながら、その解明を目指すものである。とりわけ、「台湾もの」と呼ばれる作品群の創作と、モダニズム文学や中国文学、古典文学に対する彼の関心とが主要な検討対象となっている。

佐藤春夫は大正から昭和にかけて活躍した代表的な作家の一人とされるが、彼は中国文学の影響を大きく受けると同時に、郁達夫や、田漢ら戦前の中国の文学者にも多大な影響を与えた作家である。しかし日中戦争の開戦後、佐藤が戦争賛美の立場をとったため、中国で彼の作品が研究されることは皆無となり、同様の理由で日本でもあまり高い評価を受けていないのが現状である。数少ない佐藤春夫に関する先行研究は「田園の憂鬱」、「美しい町」、「都会の憂鬱」などの作品に集中しがちであった。そしてこれらの大半は作品の耽美的な部分に注目している。このほかに、次のような作家論も書かれてきた。中村真一郎の「佐藤春夫による文学論」¹、「声」²「三三」³は、佐藤の多面性に注目し、創作方法に意識的な作家と捉えるなど創見に充ちた論である。中村光夫の『佐藤春夫論』⁴「文芸春秋新社、昭三七」⁵は、佐藤春夫を例に挙げ、芸術家としての「特権意識」⁶「選良意識」⁷を衝くことによって大正作家の限界を論じている。一方、鳥居邦朗の「芥川龍之介と佐藤春夫」⁸（『国語と国文学』昭三六）⁹は東洋精神に殉じた芥川と、饒舌体という散文精神で昭和に生き延びた佐藤を比較検討する。猪野

謙二の「佐藤春夫の側面」(『文学』昭三六)は、大正文学の虚無の認識が昭和への架け橋を成し遂げたとする。しかし、いずれも研究対象が特定のものに集中しており、また前記中村の論の影響もあって、大正作家という枠組みからの考察も目立ち、大正末期から昭和初期の過渡期における作品群に関する研究はあまりにも少なかった。

大正末期から昭和初期にかけての時代は文学史的に大きな転換を迎える重要な時期である。大正一二年の関東大震災では、在日朝鮮人の虐殺や、大杉栄の暗殺事件などがあり、その後治安維持法の制定が決定打となって、日本の政治はファシズム化の方向へと進んでいく。一方、ジャーナリズムや出版産業の発達に伴い、文学の大衆化という現象も現れた。また大正一三年ごろプロレタリア文学と新感覚派が活発な動きを見せる。その興隆に刺激された結果、既成文壇の人々は芸術の意味と意義を問い直し、自らの芸術観を再検討せざるをえなくなった。そこで文壇内で心境小説論争、散文芸術論争などの文学論争が盛んに起こった。当時、佐藤春夫は円本ブームや稿料問題などの時事問題を扱った文芸評論を執筆し、積極的に社会と交流しようとした。彼は伝統文化を守りながら、新しい西洋の文芸思潮を取り入れ、単に大衆に迎合するだけではなく、文学の内容と形式の両面から、新しい文学のための方法論の確立を模索したのだ。

本論文では、先行研究の成果を踏まえつつ、佐藤の文学と同時代の文化的コンテクストとの関係から、彼の社会へのまなざしの変貌を明らかにする。具体的には、本論文では以下の研究課題を設定した。

1 佐藤春夫の「台湾もの」といわれる創作群の分析を通して、彼の文学において社会へのまなざしが如何に変化したかを明らかにする。

佐藤は大正九年に台湾を訪問したが、この台湾旅行をもとに彼は一〇篇近くの小説・紀行文・小品などを発表している。当時において、日本の作家が植民地台湾を訪問し、そして自らの体験に題材を取り、文学作品を執筆した例はそう多くなかった。そのため、佐藤の「台湾もの」は日台比較文学研究にとって非常に貴重な資料といえよう。従来の研究は「台湾もの」に底流するエキゾチシズムを評価する見解が大半であり、「女誠扇綺譚」が「台湾ナショナリズムへの友愛に溢れるまなざしによって書かれた」ものとする論(藤井省三「植民地台湾への

まなざし——『女誠扇綺譚』をめぐって」『日本文学』平五・一」もあるが、十分な論証とは言えない。本研究では佐藤の日本の文学者としての立場を考慮し、当時の日本の社会状況なども視野にいれながら、それらの作品の持つ意味の再評価を試みる。

2 大正末期、昭和初期に現れた佐藤の「社会的小説」志向と古典への回帰を考察する。

佐藤は「文芸時評」で文壇に属する文学者たちに社会的小説を書くべきだと呼びかけたが、なぜ社会的小説を主張したのか、彼の意図とその社会的小説の方法論の解明を試みる。また、文学の大衆化、モダニズムなどの西洋の文芸思潮が大流行した時代の中、漢文学に深い造詣をもち、日本の伝統文学を深く愛しながら、一方で当時としてはもつとも「ハイカラな」作家の一人でもあった佐藤が、どのようにして独自の文学を試行したのか。西洋の新しい文芸思潮と日本の古典文学とが抗争する場として、とりわけ漢文学との関係に重点をおきながら、佐藤の文学を考察する。

第二節 本論文の構成と概要

本論文は二部構成をとり、全七章から成り立っている。第一部は「社会へのまなざし——「台湾もの」に見る文明批評」と題して、佐藤が「台湾もの」を中心に分析を行なった。この部は「第一章 佐藤春夫における文明批評の方法——「魔鳥」論——」「第二章 「霧社」論——台湾先住民女性像に見る「社会的小説」の要素——」「第三章 「女誠扇綺譚」論——「私」と世外民との対話構造が意味するもの」の各章に分けられ、植民地台湾がどのようなビジョンで書かれたか、の考察からこれらの作品の持つ意味の再評価を試みた。

第一章「佐藤春夫における文明批評の方法——「魔鳥」論——」では、「魔鳥」(『中央公論』大一二)を中心に分析した。「魔鳥」は、人類学者森丑之助の『台湾蕃族志』の第五篇「信仰及心的状態」をもとに書かれ

た作品である。「信仰及心的状態」によれば、「蕃人の伝説にハウネと称する魔鳥があり〔中略〕蕃人は此鳥を目撃すれば必ず死すべしと伝へ、且この魔鳥を使喚するとの嫌疑を受くれば一族暗殺さるゝことあり〔中略〕公益の為め其者殺害せしは、即ち魔性を退治せしものにして其行為を偉とし之を正当と認むる」と記されている。佐藤春夫はこの言い伝えからイメージを湧かせて以下のような少女ピラの話を構成した。「ある文明国」の軍隊が「蕃地」を縦断する強行軍を行っていた。先住民らは、種族へ降りかかったその災難を見て、これには魔鳥使いの呪術がはたらいているからに相違ないと考える。やがて先住民の少女ピラは外来の軍隊に犯されていたことが判明し、そのために彼女は不浄なものとされて、「魔鳥使い」にされるに至った。

この章では、まず台湾旅行中の佐藤と森丑之助との交流、および台湾先住民の信仰を調査してみた。その結果「魔鳥使い」といった先住民の信仰は、悪霊その他の悪しき存在が「蕃地」への侵入を防ぐためのシステムであるということが明らかになった。「魔鳥」の中では、語り手の「私」がピラの話をめぐる行方思考も書かれている。すなわち「私」が「蕃地」に認めた異端・異常なものを排除していくという社会構造は、文明国の中にも同じように見出されるのである。「魔鳥」は、表面的にはピラの物語として描かれているが、その寓話性は日本の近代化の矛盾が集約的に顕在化した関東大震災中の流言蜚語や朝鮮人狩りなどの状況を批判していたとも考えられる。以上を踏まえて、「魔鳥」からは、他社会で疎外された人間を描くことで自分がいる社会の問題点を批判するという佐藤の文明批評の方法が読み取れた。

第二章では、作品「霧社」〔『改造』大一四〕を取り上げる。「霧社」は台湾先住民の居留地霧社への旅行を背景として、日本人と結婚したため、あるいは売春のため、「不浄」と見なされて先住民の社会から排除された先住民の女性たちを登場させて、日本文学者「予」と彼女らとの出会いを描いている。先行研究では先住民社会に存在する排除の構造を軽視し、結果として先住民の社会の中でも弱い立場に立つ女性の問題が見落とされていた。そこで、この章では、先住民女性と日本人の結婚問題、売春問題に焦点を当て分析を行った。「不浄」とされた先住民の女性たちに美を見る「予」のまなざしは、急激な軍事力の増強や、工業化社会の確立などを追及した日本の近代化の過程では周縁的にしか扱われなかった文学者という存在と重ねられている。しかし、「予」

はそれらの先住民の女性たちに共感を覚えつつも、彼女たちに自己同一化することができないという複雑な感情を表わしている。このように、この章では、「霧社」を通して、佐藤の文学者としての自己追及の苦悩を読み解いた。

第三章では、「女誠扇綺譚」(『女性』大一四)を取り上げ、日本人の文学者「私」と「世外民」という台湾知識人との対話を中心に分析する。「私」と世外民の「女誠扇」に関する会話はふたりが同じ東アジアの知識人、いわゆる(同文同種)、「台湾議会議設置請願運動に關スル当局ノ談」『下村宏文書』大一〇)の人間として、中国古典の教養を共有していることを示す一方で、「私」と世外民の現実を見つめる目の違いを引き立たせている。文化伝統へのまなざしは歴史の中を生きる中国人の(生きた精神)を見つめることができるかどうかの差異と言える。そこに抑圧された民族解放への願いが込められていることは確かであろう。「女誠扇綺譚」からは佐藤のユートピア志向、南方憧憬の変貌や解体が捉えられるのである。

第二部は「方法論の模索——「社会的小説」と古典回帰」と題として、佐藤の「社会的小説」の方法と古典回帰のあり方を明らかにした。この部は「第四章 「文芸時評」論——文学・ジャーナリズム・文明批評——」、「第五章 社会的小説志向——「F・O・U」一名「おれもさう思ふ」——論——」、「第六章 『車塵集』における古典和歌との交渉」と「第七章 「春風馬堤図譜」の模倣とオリジナリティ」の四章に分けられている。

第四章では、佐藤の文芸評論「文芸時評」(中央公論)昭二)を取り上げ、佐藤は「性格描写」と「文明批評」とを小説道をゆく車の両輪だとして、より文明批評に力点をおいた社会的小説を呼びかけた経緯の整理をし、当時佐藤が社会における文学の役割、文学者の役割をどのように考えていたかを考察した。従来の研究は、「文芸時評」への具体的な分析がなかったり、あるいは「文芸時評」が発表された当時の文化的コンテクストを研究しなかったりと、いずれも十分な研究ではない。そのため、この章では「文芸時評」を、心境小説論争・円本ブームと取り合わせて分析し、「文芸時評」の意味と新しい位置付けを試みた。「文芸時評」は、昭和二年という文学的状况の上では複雑な混迷の時期にあつて、眼前の問題を解決する道筋を、あえて明治以来の文学史の中に立ち戻って探し出そうとした評論である。そこには、大逆事件や大杉栄の虐殺、ジャーナリズムの偏向性などへの批判があり、社会的自我を持ちたいという願望も込められていたと考えられる。

このように、文芸の社会化が訴えられる風潮の中、佐藤春夫は率先して社会的小説を呼びかけたが、それを実践するには、心境小説を乗り越えて社会的小説の創作方法を確立させることが課題とされている。第五章では佐藤の「F・O・U 一名「おれもさう思ふ」」（大15、以下「F・O・U」と略称）という作品を取り上げ、「文明批評」と「性格描写」との二つの方面から分析し、佐藤の社会的小説の創作方法を明らかにした。

大正前期の佐藤春夫の作品は社会から完全に遊離した一個人の内面を描くものばかりであった。「田園の憂鬱」〔第二稿、『中外』大七・九〕や「美しい町」〔『改造』大八・八〕などがその代表である。これらについて、尖戸儀一は「ただ一人の眼から眺められた風景のさまざまな変化でしかない。つまり根本に於いて独白である」〔『佐藤春夫』『文学』昭和一一・七〕と指摘していた。しかし、大正末期になると、佐藤の作風も変化した。例えば「F・O・U」では意識の形象化と対話形式を使用しているが、これはドストエフスキの文学の影響を受けていると考えられる。「F・O・U」において、心境小説作家の観念世界は精神障害者である芸術家「マキ・イシノ」の姿として表現され、「マキ・イシノ」を対人関係の中で、すなわち対話という形式を用いて描くことによつて、心境小説作家の現実離れ、「おれもさう思ふ」（「われ思う」）世界を諷刺している。佐藤はこうした自意識の逆説性を利用して、社会を批判し、文学作品がもつ異化作用をとりわけ重視していると言えよう。

大正後期から昭和初期にかけて、西洋の物質主義に対抗して日本の精神主義を高揚するため、俳句ブームや南画ブームなど古典回帰の動きが起つた。こうした国粹主義思潮、古典尊重の気運は、それまでもっとも「ハイカラな」作家と見られていた佐藤の中にひそむ、伝統への志向を深めさせた。そこで、第六章と第七章は古典を題材にした作品を取り上げ、佐藤の古典回帰のありようとそれが彼に与えた影響を解析した。

第六章では、『車塵集』（武蔵野書院、昭二）の訳詩と元の漢詩と比較し分析した。『車塵集』が翻訳された当時は、西洋崇拜や大和言葉純化による漢詩文学を軽視する時代であった。一方『車塵集』は、本歌取りの手法を取り入れるなど、中国の女流詩人とその詩を紹介するとともに、古典和歌のもつ大和言葉の美を提示している。『車塵集』の分析を通して、この翻訳詩集に漢詩文学を軽視する時代風潮を批判し、外国文学の受容に関して文学者が持つべき正しい立場——「和魂漢才」の立場を示そうとする意図があつたことを指摘した。

第七章では、映画のシナリオとして書かれた「春風馬堤図譜」〔『中央公論』昭二、以下「図譜」〕とその原案であった与謝蕪村の俳詩「春風馬堤曲」〔以下「曲」〕とを比較研究している。

「曲」は俳句形、和歌形式、それに漢詩の五言絶句形式などのさまざまな詩形を組み合わせた混合形態の作品であり、イメージの連鎖によって生じる絵画性が顕著な特徴である。焦点人物として老人「余」——「娘」を重層的に仮構することによる蕪村の実情吐露〔自意識の形象化〕などの手法、つまり、視覚的イメージの連鎖によって「物語」を生成する特徴をもっていることから、「曲」は映画と共通する特性を有する作品であると言える。一方、「図譜」においては、娘の視点や老俳諧師の視点、「月」の視点などが交錯して、多重の視点を形成しているのである。「図譜」はこれらの視点を移動、転換することで、娘の世界、老俳諧師の世界、狐の世界などの異なる世界を組み重ね合わせ、これらのイメージの対話性を利用して、人間世界の様々な葛藤を描き、現実と幻想が渾然一体の世界を表現している。この章では、「図譜」にみられる多重の視点の意味を分析することを通して、「図譜」がいかにかに映画という新しい芸術ジャンルを利用しながら、日本の伝統文化を表現しているかを考察したのである。